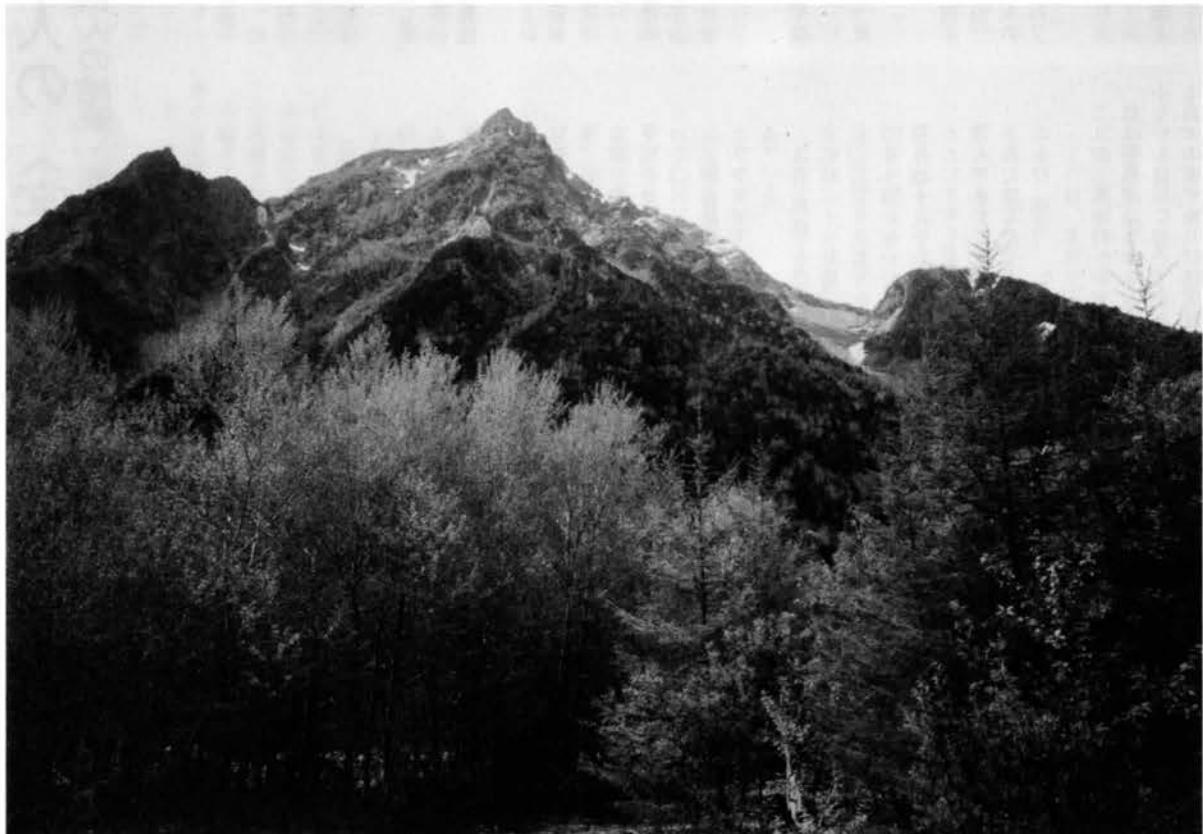


山と博物館

第45巻 第8号 2000年8月25日

市立大町山岳博物館



新緑と明神岳

撮影 大石 高志

五月の初旬、里では代かきが盛んに行われ、早い農家では田植が始まると、落葉松の芽吹きが始まっている。私はその芽吹きを見て今年の春山の状態を頭に浮かべる。芽吹き始めだと鹿島槍の本谷や西沢にはしっかりと雪が残っていて、春山の楽しみを充分に味わうことができる。春先に山へ入って最初に緑だなあと感じるのは、この落葉松の芽吹きではないだろうか。そして五月の中旬頃のブナ林、ブナより少し遅れて岳カシバと続く。

私は四季を通じてそれぞれのすばらしい表情をみせてくれるブナ林がとても好きだ。そのフィールドは、サンアルビナ鹿島槍スキー場から遠見尾根の小遠見に続く黒沢尾根である。三月の中旬、山スキーを使うとこのブナ林へは二時間もあれば充分だ。ブナは冬芽の中で鱗片に包まれたまま芽吹きを待っている。山スキーで気儘に歩きまわれるブナ林は、身近にはこしかない。佐野坂を過ぎて、オリンピック道路から西方に見える稜線がそのブナ林である。

今年は三月に降った雪が多く、里から眺めても根元の雪が消えると同時に芽吹いて行くのがよく見えた。例年より少し遅れているのをブナ自身が知っているのだろう。裸木の斜面でひとり青々と茂つて丸い樹冠を広げているのが、まずブナと見ていいと思う。

この新緑のブナ林へ入ると、ここだけ空気が異なるのではないかと思うほど森の精氣につつまれて、実にさわやかな気分になる。その森の中にタムシバが咲き、オオカメノキ、ムラサキヤシオツツジ、林床にはシラネアオイ、サンカヨウ、エンレイソウ、ツバメオモトが次々に花をつける。

一〇年前、嵐山脈のムスマラ・アタ（七五四三）の登頂を終え、緑の全く見えない上空を飛び、我が家へ帰った朝、周囲の緑がきびしかった登山活動をいやしてくれたのを思い出す。

「緑」それは心のオアシスだ

松原 繁

残された二人の「西糸屋」を愛された岳人の絶筆・墨跡ものがたり——(2)

松溝明さんの遺書

残された(字)の次の方は、岳人では知らない人ではない。西糸ヤニ米代借り、三升分の辞を遺書の末尾に残されて、昭和二十四年(一九四九)槍ヶ岳の北鎌尾根で逝った、「風雪のビバーク」で知られる松溝明さんである。

昭和十四年(一九三九)、弱冠十七才にして、嚴冬期の北穂高岳滝谷第一尾根を、ガイドの上条孫人氏と初登攀され、戦時中すでに先鋭的なアルビニストとして名をなした。

松溝さんの宿は時に「常さ」の小屋、あるいは明神館、または徳沢だつたりしたが、足がかりはわが家のようだった。ここに昭和三十五年(一九六〇)、朋文堂発行「風雪のビバーク」の松溝さんの山行記録に、たまたまその気配を感じるので、ここに要約・転載しておきたい。〔〕内が転載部分で、そのほかは要約である。(一)は奥原注。

奥原教永

(去年の秋から数えて四度目に、やつと

懐かしい北穂の頂きを踏んだ。じつに七年振りである。南峰の姿は大分変わったけれども、頂の気分はちつとも変わっていない。頂上の尖い岩も、ガレの広場も(滝谷を登つてみると、いつもここでザイルを放り出してゴロリと横になつたものだ)、北尾根のカムも、それから、沈んで行く太陽も。何もかも懐かしくて、大きな声で何か叫んで見たいような衝動にかられた。

新しく建つた北穂小屋に泊まり、小山兄弟の歓待を受ける。同宿五名の静かな夜、こたつを囲んでも足が冷たく、星が素敵に美しかった。遅くまで山の話に花を咲かせ、床についたのは二十四時近かつた。

(北穂高岳頂上付近には今でも「松溝岩」とクラマーに言い継がれている岩がある)

錫杖岳・穂高岳 パーティー 松溝

明・権平完

昭和二十三年十月一日 島々からライ

トをつけて二俣、泊。

二日 徳本峠から上高地、泊。

三日 中尾峠を越え元鉱山小屋(現・

新穂高温泉のすぐ下流、今は)泊。

四日 雨、宿の人は男一人、女四人の女護カ島で、うち二人はうら若いおじ

ヨウサンだ。

五日 エボシ岩登攀。

六日 七月雨、滞在。

八日 滝谷登攀・北穂高(滝谷を週上してB沢から頂上へ着いている)

これが上高地のわが家の最後となつた。私は不思議に松溝さんの二度の姿が、わずかながら鮮明に残っている。一度目は後述する島々の家であり、二度目はこの山行の十月

二日か九日の夜のことである。当時、私は高校三年生だったが、いくぶん胸部疾患の疑いを理由に、学校をサボっていたのか、あるいは秋休みであったのか、ちょうど上高地へ上がつていた。

当時のわが家には、六畳ほどの墓壇敷きの

部屋の片隅に暖炉裏があり、その横に座つて

我々は食台に向かい夕飯を食べていた。その

とき、一畳分だけ食台からはずれて墓壇が敷

いてあり、そこで松溝さんが、ご本人よりは

るかに縦・横が大柄な権平さんに、次の山行

の同行を説いていたよう見えた。具体的

にどここの山とは、私の場所では聞こえなかつたが、権平さんはあまり乗り気はないようだ

った。父は彼らのすぐ横だったから、北鎌尾根からの縦走と知つていたと思う。遭難後、

父が「あのとき、権平さんが誘いに乗つてたら……」と口にしたことがあった。

さて、父は「風雪のビバーク」へ

突き進むことになる。

次は松溝さんが帰京後すぐ、所属する「徒

歩溪流会」へ提出した報告書からの抜粋である。

〔〕内は本人の文章のまま、ほかは要約である。

(十二月月十二日、五時松本着。ただちに島々へ行き、西糸にて干飯・餅各三升依頼。……)

この日は大町へ泊まり、十三日から九

月(お祭り)には帰りますよ

〔〕そう言ひおいて出た上高地も、もうお

祭りはすんでしまつて、待つていたのに」とおバサンが残つたご馳走を運んできてくれる。なんだかとても満たされた感じだ。そして開けた火一。

十日 帰京。

(十七日朝、帰京した松溝さんは、またすぐ岐路に立たされるが、夜、星空となり、コンロも応急修理ができて登攀続行と決めた。しかし、またすぐ大風雪が襲来し、四日、露營テントはぱりぱりに凍つて使用不可能となり、鋭く天に突き上げた「槍」の尖峰を攀じ登つて、ようやく第一の難関を突破するのだ。北鎌尾根に取りついてから時ならぬ雨に遭つて、岩稜が連なる槍ヶ岳の北鎌尾根から北穂高岳、奥穂高岳・西穂高岳を経て焼岳まで、まだ誰もなしえなかつた縦走を計画し、昭和二十三年末、大町から高瀬谷へ入つた。

パートナーの有元克己氏が少し遅れて合流

し、十二月三十日から改めて二人での登攀が始つた。長いアプローチの高瀬川をたどり、

北鎌尾根に取りつき、いくつかのビーグを越

え、難所の「独標」と呼ばれる岩峰を登攀し、

雪洞とツエルト(緊急用簡易テント)での登攀のうえ、炊事用コンロが不調となるなど、悪条件での続行となつた。

二十四年一月二日、連日の悪天候で進退の

手もアイゼンバンド(金カンジキを靴につける布のバンド)も凍つてしまい、ついにアイゼンなしでの登攀中、有元氏は千丈沢側へ滑落して、登り直すことができなくなつた。松

溝さんは槍ヶ岳への計画をやめ、千丈沢を下

るつもりで有元氏のもとへ下つたが、六日、

大雪の積雪と有元氏の状況はどうとも脱出で

きないと判断し、「有元ヲ捨テルニシノビズ、死ヲ決ス」と遺書(注1)に記すことになる。

この二度の島々のわが家の滞在で、今でも目に浮かぶのは、襟に羊かと思われる真っ白い毛皮を縫いつけたウインドヤッケを着て、少し甘えた口調の松溝さんである。多分、北鎌尾根から西穂高岳までの、初縦走に賭けた

晴れの装備と推察すれば、私が見たのはこの最後の二十日ではなかつたか。

戦前、若くして先鋭的なアルビニストとし

て名を馳せた松溝さんは、戦後復員してから

山登りを再開した。嚴冬期、峻険な雪と氷の

岩稜が連なる槍ヶ岳の北鎌尾根から北穂高岳、

奥穂高岳・西穂高岳を経て焼岳まで、まだ誰

もなしえなかつた縦走を計画し、昭和二十三

年末、大町から高瀬谷へ入つた。

パートナーの有元克己氏が少し遅れて合流

し、十二月三十日から改めて二人での登攀が始つた。長いアプローチの高瀬川をたどり、

北鎌尾根に取りつき、いくつかのビーグを越

え、難所の「独標」と呼ばれる岩峰を登攀し、

雪洞とツエルト(緊急用簡易テント)での登攀のうえ、炊事用コンロが不調となるなど、

悪条件での続行となつた。

二十四年一月二日、連日の悪天候で進退の

手もアイゼンバンド(金カンジキを靴につける布のバンド)も凍つてしまい、ついにアイゼンなしでの登攀中、有元氏は千丈沢側へ滑落して、登り直すことができなくなつた。松

溝さんは槍ヶ岳への計画をやめ、千丈沢を下

るつもりで有元氏のもとへ下つたが、六日、

大雪の積雪と有元氏の状況はどうとも脱出で

きないと判断し、「有元ヲ捨テルニシノビズ、死ヲ決ス」と遺書(注1)に記すことになる。

以下は同年八月二十三日、法政大学山岳部によつて発見された遺体から少し離れて流失のおそれのない岩陰から防水紙に包まれて見つかつた懷中手帳に記された遺書からの抜粋である。(二) 内は奥原注。

31日 アラレ、ミヅレの中ツエルトでビバーク(準備不完全での露營)となつた。雪が激しく降り、体が濡れて眠れなかつた。

(昭和24年1月)

1日 大風雪 全身濡れて冷え切り、雪洞を掘つて入る。全部脱いで乾かし、ガソリン消費大。ラジュース(ガソリンコンロ)がまた不調となる。

2日 同じ風雪 停滞。ガソリンを直に焚いて水を作つた。雪洞が雪で埋まり、何回も除雪した。登るか下るか決断を迫られたが、ラジュースが応急処理も出来て、夜、星空となつて続行と決める。

3日 (天気の記録はないが、就寝21:30 入口0℃) とあるから、午前中くらいは晴天で後曇り、気温が上がり、天気は下り坂となつたと思われる)

4日 風雪の中、北鎌尾根の核心部である「独標」といわれる岩峰を乗り越え、雪洞を掘つてビバークした。(以下、漢字以外は片仮名書きとなつてゐる)

カンキビシキタメ有元ハ足ヲ第二度トーショウニヤラレル、セツドーハスク(小さく)、ヤ中入口ヲカゼニサラハレ全身ユキデヌレル、

5日 フーセン SNOWHOLE(雪洞)ヲ出タトタン全身バリバリニコオル、手モアイゼンバンドモ凍ツテアイゼンツケラレズ、ステップカット(ビックルで氷を削つて足場を作ること) デヤリマデユカントセシモ(有元氏) 千丈側ニスリップ 上ガリナオス力ナキタメ共ニ千丈へ下ル、カラミ(から身) デモラツセ

手ノユビトイショウデ思フコトノ千分ノモカケズモーイワケナシ、ハハ、オトートヲタノミマス

有元ト死ヲ決シタノガ6:00、今14:00 仲々死ネナイ漸ク腰迄硬直ガキタ、全シンフルヘ有元モHERZ(胸)、ソロソロクルシ、ヒグレト共ニ凡テオハラン

(この後、三人の弟に、親への孝養を頼んでいる)

サイゴマデタカウモイノチ友ノ辺ニスツルモイノチ共ニユク(松ナミ)

(この間に有元氏が漢字・平仮名で別れる言葉を記している)

我々ガ死ンデ死ガイハ水ニトケ、ヤガテ海ニ入り、魚ヲ肥ヤシ、又人ノ身体ヲ作ル、個人ハカリノ姿 グルグルマワル松ナミ

竹越サン 御友情ヲカンシャ 川上君

アリガトウ(松濤)

有元 井上サンヨリ2,000エンカリボケットニアリ

松濤 西糸ヤニ米代借り、3升分

以上で、この凄惨な遺書は終わつてゐる。わが家にとつて、常に消えない痛恨事は、この遺書のいちばん最後、命の尽きる寸前に「西糸ヤニ米代借り、三升分」と松濤さんに書かせたことである。

子、孫、曾孫を含め、戦後の食料難を体験しない次の世代のために、当時のわが家の苦境の状況を記しておきたい。人の死の直前まで、わざかな米代を請求したかのような強欲な父母と錯覚されかねないためにも―。

田んぼはおろか雑穀ひとつ取れない島々で

ルムネマデ、15時SH(雪洞)ヲホルトカ湯侯迄ト思フモ有元ヲ捨テルニシノビズ、死ヲ決ッス

(この後、家族や先輩への別れの言葉がある)

手ノユビトイショウデ思フコトノ千分ノモカケズモーイワケナシ、ハハ、オトートヲタノミマス

有元ト死ヲ決シタノガ6:00、今14:00 仲々死ネナイ漸ク腰迄硬直ガキタ、全シンフルヘ有元モHERZ(胸)、ソロソロクルシ、ヒグレト共ニ凡テオハラン

(この後、三人の弟に、親への孝養を頼んでいる)

サイゴマデタカウモイノチ友ノ辺ニスツルモイノチ共ニユク(松ナミ)

(この間に有元氏が漢字・平仮名で別れる言葉を記している)

我々ガ死ンデ死ガイハ水ニトケ、ヤガテ海ニ入り、魚ヲ肥ヤシ、又人ノ身体ヲ作ル、個人ハカリノ姿 グルグルマワル松ナミ

竹越サン 御友情ヲカンシャ 川上君

アリガトウ(松濤)

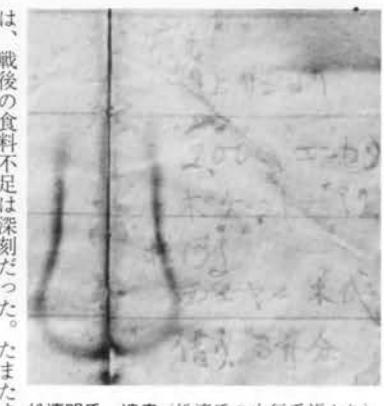
有元 井上サンヨリ2,000エンカリボケットニアリ

松濤 西糸ヤニ米代借り、3升分

以上で、この凄惨な遺書は終わつてゐる。わが家にとつて、常に消えない痛恨事は、この遺書のいちばん最後、命の尽きる寸前に「西糸ヤニ米代借り、三升分」と松濤さんに書かせたことである。

子、孫、曾孫を含め、戦後の食料難を体験しない次の世代のために、当時のわが家の苦境の状況を記しておきたい。人の死の直前まで、わざかな米代を請求したかのような強欲な父母と錯覚されかねないためにも―。

田んぼはおろか雑穀ひとつ取れない島々で



松濤明氏 遺書(松濤氏の山行手帳より)

板などのない、薄暗い部屋だった。そのうえ、視力の落ちかけた祖父と腰を曲げつゝ介護していた祖母は、離れてつくられたバラックの小さい小屋で、一代で築いた家屋敷を土砂に埋められ、災害を恨みつつ哀れな日々を送っていた。

こんな状態の島々の家に松濤さんがやつて来たのである。二人の病人と年寄りにささえ十分の米が入手しにくいとき、あの世渡りの下手な父がどんな工夫をして白米・餅を手配したのかと思うとその苦惱が察せられる。

屏風岩に賭けた岩岡繁雄さん、北穂高に生涯を捧げた小山義治さんほか、物資・食料の不足を山への情熱でかき消して、新記録をつくる大学山岳部への協力は、戦後の混乱期を家長として送らねばならない、世事にうとい父にとつて、不得手でも生きがいを感じるお手伝いだつたのではないか。

その意味で、松濤さんのこの壮舉に父は諸手を上げて賛成し、協力したに違いない。上条孫人さんが松濤さんのガイドであつたから、案内組合の事務所であるわが家へは、松濤さんも戦時中から出入りしていただろう。その松濤さんが、わが家の苦境を知つての糧秣依頼であつて、「米代借り」の「借り」は、父母の好意、人情の「借り」を表現したのではないか、と私は思つてゐる。

茨木先生の遺留品の発見者が私の山の先輩・小山義治さんであり、この松濤さんの遺体の発見も、やはり先輩の傘木徳十さんであつて、何か不思議な因縁を感じざるをえない。注1、この遺書は平成10年7月に松濤明さんの実弟、裕氏から大町山岳博物館に寄贈された。

(上高地 西糸屋 山荘)

そして決定的なビンチがわが家の一階埋没である。終戦直後の昭和二十年十月十日の水害によつて、土砂が流れ込んだのである。急速、物置としていた二階を仕切り、汚れた畳と藁蓆を敷き、部屋として暮らしていた。もちろんガラス戸はなく、古びた障子で、天井

訂正とお詫び

第45巻第6号3ページ掲載の絵画写真下説明文に「白土谷」とありますが「白出谷」の誤りです。訂正させて頂くとともに、お詫びいたします。

(編集部)

イヌワシ飼育奮闘記（前編）

横澤志津



写真上：オス／下：メス

そのため、成長した今もなお飛ぶことが上手ではありません。しかも、お客様が観覧する通路側にいて覗いたお客様を驚かしているのです。「はたしてこんな調子で奥さんに、ましてやお母さんになんてなれるのかしら」と一抹の不安は心中に残つたままの婿取りでした。

平成一〇年七月六日、待ちに待つた日です。山岳博物館で飼育しているメスのイヌワシのものとへ、遠く仙台市八木山動物公園より待望のお嬢さんがやつてきました。當時メスは四歳。そろそろお年頃では？ ということで、ブリーディングローン（繁殖を目的とした貸借契約）によって仙台からの婿入りが決まつたのは一月のこと。それから約半年、受入側の準備も終わり、少々興奮気味のオスが輸送箱に入つて到着しました。博物館に到着したオスには、これからのお見合いのために、メスの飼育舎の隣へ入つてもらいました。

当館で飼育しているメスは幼い頃に右脚を骨折し、半年ほど飛べない時期がありました。

普通、相性が悪い個体同士では、たとえ網越しだうともけんかしたりするものなのでですが、彼らはとくに争う様子もなく、お互に興味を持つているようでした。オスの鳴き声もよく聞こえてくると、（イヌワシは繁殖期になるとよく鳴くようになります）、一〇月二八日、晴れて同居となりました。

同居後、不安が的中しました。せっかくのカレシとの甘い同棲生活が始まつたというのにメスは相変わらずの地面生活。あげくのには、自分を誘つているオスに対して怒りをぶつけるようになりました。万が一、二羽がケガでもしてはと、同居から約半年で二羽を隔離。再び網越しのお見合い状態となりました。

しかし、ここで終わつては今後の見通しも暗いま。私たちは用心しつつ、もう一度同居させてみようと考えました。イヌワシの産卵期は二～三月です。まだぎりぎり間に合つかもしないと、十二月一〇日、再同居させました。オスは前回の同居に比べ、メスに対してやや慎重になつたように見えましたが、それでも相変わらずメスを呼んだりそつと近付いてきました。私たちはメスを説得したいような衝動にかられました。私たちやオスの気持ちを知つてか知らずか、メスは地面生活を続いているのででした。

そのため、成長した今もなお飛ぶことが上手ではありません。しかも、お客様が観覧する通路側にいて覗いたお客様を驚かしているのです。「はたしてこんな調子で奥さんに、ましてやお母さんになんてなれるのかしら」と一抹の不安は心中に残つたままの婿取りでした。

年も明けた一月一八日のことです。ふと作業の手を休めてイヌワシ舎のそと、二羽が並んで止まつていました。しかも、地面でも餌台でもなく、私たちが中段と呼んでいる東台よりも一段低い棚の上にです。メスは何とか飛びあがれたようでした。その日からメスは地面と中段を行き来するようになり、まだ不安の残る中ではあります。これはペアリングが成功したと考えていいのだろうと私たちちはちょっぴり嬉しくなつていました。

この頃からオスはもう巣作りにとりかかり、私たちが事前に巣台に入れておいた巣材を好きなように動かしていました。この様子は飼育管理舎のモニターで見ることができます。まだオスが来る前、巣の中の様子が見えるようなどカメラを設置してあつたからです。二月に入ると、モニターにはメスの姿も映るようになりました。巣の中では、彼らが二羽で並んでいる姿も見られました。

しかし、この年、繁殖には至りませんでした。でも、出会つて一年、まだまだこれから。焦つてもうまくいきません。私たちには二羽の仲の良さそうな様子を見て、「このペアリングは決して失敗ではない」と、翌年に希望を持つなぐことができました。

（大町山岳博物館 動物飼育担当職員）

山と博物館 第45巻第8号

発行 平成12年8月25日発行
長野県大町市大字大町八一五六一
市立大町山岳博物館

TEL 026-423-1021
FAX 026-423-1022
印 刷 大糸タイムス印刷部
郵便振替口座番号〇五四〇七一三九一
定 価 年額 一、五〇〇円（送料共）切手不可